

**滋賀県立安土城考古博物館
展示基本計画**

令和3年3月

滋賀県

目次

第1章 展示リニューアルの背景

1-1. 博物館の理念	01
1-2. 現況	04
1-3. 博物館の強み	14
1-4. 利用者のニーズ	17
1-5. 課題	22

第2章 展示リニューアルの基本方針

2-1. 基本的な考え方	25
2-2. 基本方針	27
2-3. 展示リニューアル整備の概要	33

第3章 展示計画

3-1. 基本方針	37
3-2. 展示構成	39
3-3. 平面計画・空間イメージ	41
3-4. 望楼ホール	47
3-5. エントランスホール	48
3-6. 工事工程イメージ	49

第4章 事業・運営計画

4-1. 事業運営における現状と課題	50
4-2. 課題解決へ向けた方策	51

第5章 事業推進計画

5-1. 建築設備改修の基本方針	55
5-2. 事業工程および事業概算	59

資料編	61
-----	----

第1章 展示リニューアルの背景

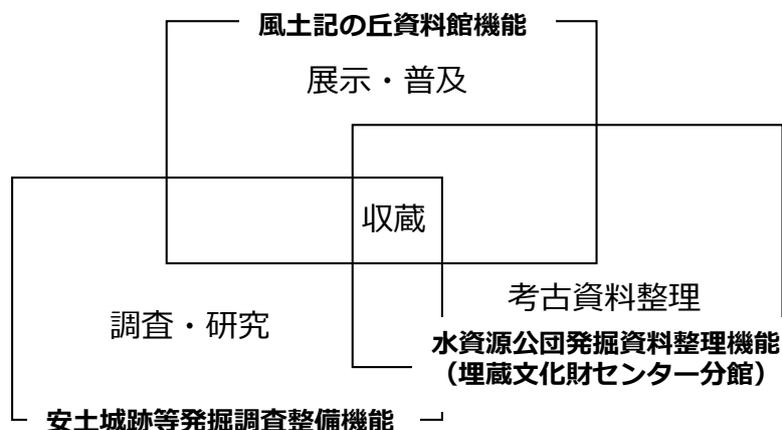
1-1. 博物館の理念

1. 滋賀県立近江風土記資料館の位置づけ

- 滋賀県立安土城考古博物館（以下、「本館」と表記）の前身は、昭和45年に開設された「近江風土記の丘資料館」に遡ります。「風土記の丘」とは、地域に存在する史跡を広域に保存し活用することを目的に、文化庁が昭和41年に設置した構想（「風土記の丘設置構想」）で、滋賀県では昭和41年「西都原風土記の丘」、昭和42年の「紀伊の国風土記の丘」に引き続き、全国で3番目に設置されました。資料館はその中核施設として設置されたものです。
- その後、資料館の再整備・活性化を目的として、昭和63年に近江風土記の丘整備基本計画を策定し、(1) 良好な自然環境の活用、(2) 既存施設の活用、(3) 複合化による活性化、(4) 風土記の丘ネットワークのセンターとすることを基本方針として示し、新しい施設として生まれ変わらせることとしました。
- 特に(3) 複合化による活性化については、当時課題であった水資源公団（当時）関連発掘資料整理場所と新しく始めることとなっていた安土城跡の調査・整備事業の基地の必要性から資料館に3つの機能を配置し、それらを有機的に結び付け、複合化することで、近江風土記の丘ひいては公園全体の活性化を図るものとしています。

図表1：近江風土記の丘資料館の施設機能

（『近江風土記の丘整備基本計画報告書』より作成）



2. 本館の理念・目的・使命

- これまでの流れを汲み、平成4年に資料館は館名を「滋賀県立安土城考古博物館」に変更し開館、翌年には入館者が延べ10万人に到達するなど大きな話題を呼びました。平成8年には入館者が延べ30万人を突破し、同年公開承認施設の承認を受けています。
- 設置時においては、前身の資料館を継承する形で近江風土記の丘の中核施設に位置づけられており、特別史跡安土城跡をはじめ、史跡大中の湖南遺跡・瓢箪山古墳・観音寺城跡のガイダンス施設として、その時代の歴史や文化を紹介することをねらいとしてきました。また、常設展示を発展させるため、城郭と考古を主なテーマとした特別展・企画展の開催や講座・講演会等の普及啓発事業の展開、併設された埋蔵文化財センター機能により、考古資料の調査・整理・復元の公開を行い、地域文化の拠点施設として活動してきました。
- 本館の設置目的・事業の基本的な考え方は、以下のとおりです。

図表2：設置目的・事業の基本的な考え方

<p>■ 設置目的</p> <p>「郷土の文化財を保存し、且つその活用を図り、 県民の文化の向上に資すること」</p> <p>■ 事業の基本的な考え方</p> <ol style="list-style-type: none">1. 「近江風土記の丘」を構成する史跡を事業の中核とする、テーマ館として活動。2. 大中の湖南遺跡・瓢箪山古墳・観音寺城跡・安土城跡を軸に、関連する県内の資料も展示し、「近江風土記の丘」に関する歴史や文化に対する理解を深めるのに役立つ地域博物館を目指している。3. 「近江風土記の丘」の歴史的風土の所産である歴史・考古・民俗資料を、調査・収集・保管・研究し、展示や体験学習により教育・普及活動に役立っている。4. 「近江風土記の丘」の史跡群や歴史的風土を通して地域の発達の姿を正しく理解する、生涯学習の場とする。5. 隣接する安土城郭調査研究所と、館内で埋蔵文化財の整理調査をすすめる、滋賀県文化財保護協会調査整理課と連携を図っている。6. 埋蔵文化財センター機能部分では、考古資料の調査・整理・保存科学に関する施設および設備を整備し、博物館では歴史資料を保存・管理するとともに、その活用を図っている。

3. これまでの活動とリニューアルの経緯

- 本館は現在に至るまで、近江風土記の丘内の史跡を中心に、地域の歴史や文化に対する理解を深めてもらう拠点として、多くの県民に利用されてきました。安土城跡をはじめとする多数の史跡の発掘・調査・研究やそれらの成果を基にした特別展・企画展の開催、県民へ向けた普及啓発活動など豊富な実績を重ね、入館者数は延べ 130 万人を突破、地域の歴史学習・生涯学習の場ともなっています。
- しかし、開館から 25 年以上が経過し、常設展示の基本部分の更新ができていないために平成元年から 20 年かけて実施してきた安土城跡の調査成果が十分に反映できていないこと、利用者と展示コンセプト、期待される質・量のギャップなどから近年入館者数の落ち込みが認められること、公開承認施設としての機能維持のための対策を講じる必要が生じてきたことなど、展示内容や展示環境に様々な課題が発生しています。
- また、これらとは別に安土城築城 450 年を令和 8 年度に控え、機運醸成を図るため令和元年度から「幻の安土城」復元プロジェクトを立ち上げ、安土城跡への興味・関心および天主復元に対する機運を高めるための取組も行っており、安土城跡の情報を発信する中枢拠点としての機能をさらに強化する必要があります。



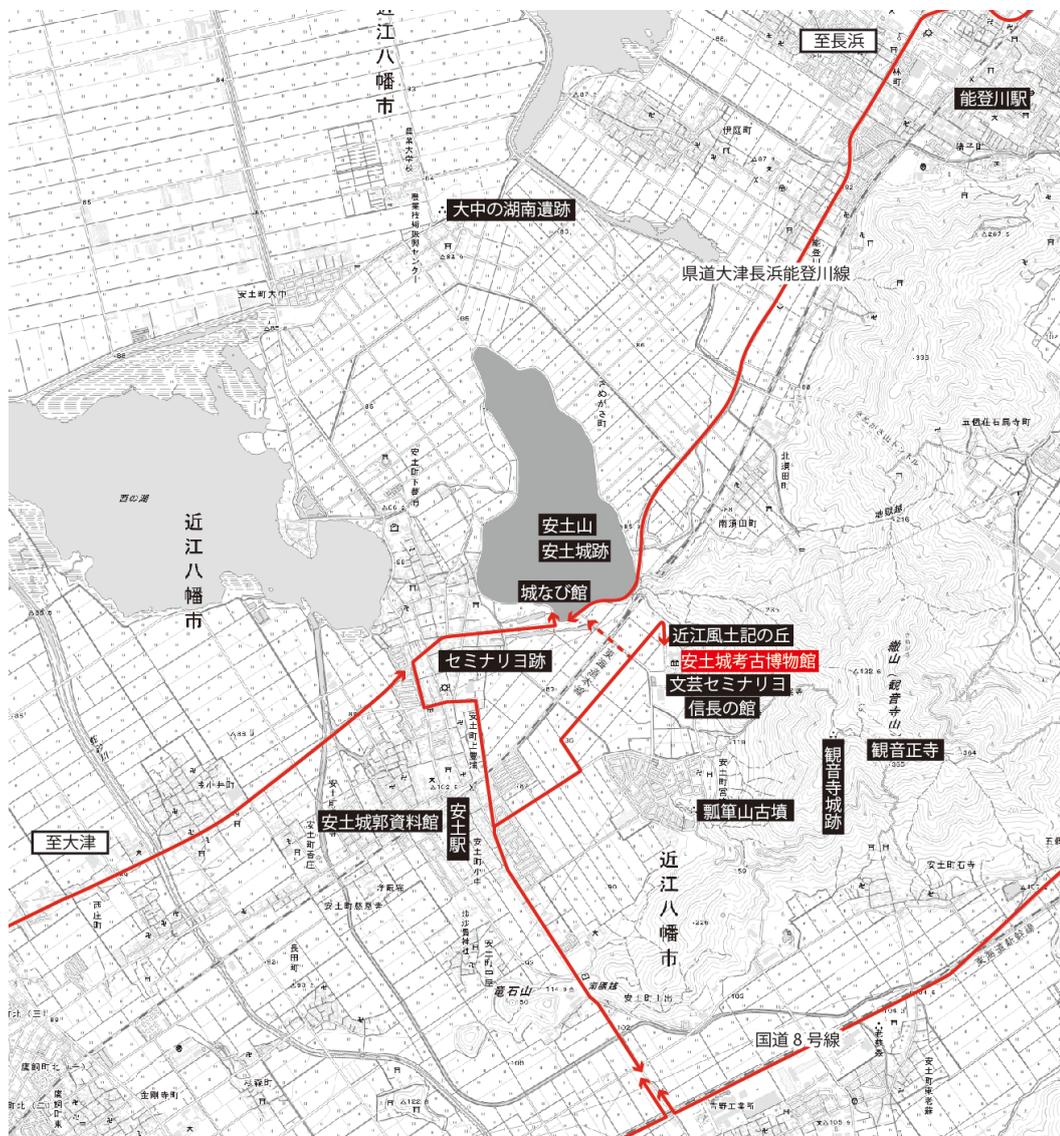
滋賀県観光キャンペーン
「戦国ワンダーランド滋賀・びわ湖」

1-2. 現況

1. 所在・アクセス

- 本館は、安土城跡・大中の湖南遺跡・瓢箪山古墳・観音寺城跡等で構成される近江風土記の丘内に位置し、JR 琵琶湖線安土駅より徒歩 25 分の距離にあります。
- 利用者のアクセスは、郊外にある本館の特性からも自家用車での来館・周遊が一般的となっています。かつては鉄道での集客向上を目的として駅からのバス運行も行っていましたが、利用者の増加には至らず廃止となっています。

図表 3：本館へのアクセス図（車）



2. 沿革

- 近江風土記の丘設置以降の主な出来事は、以下のとおりです。

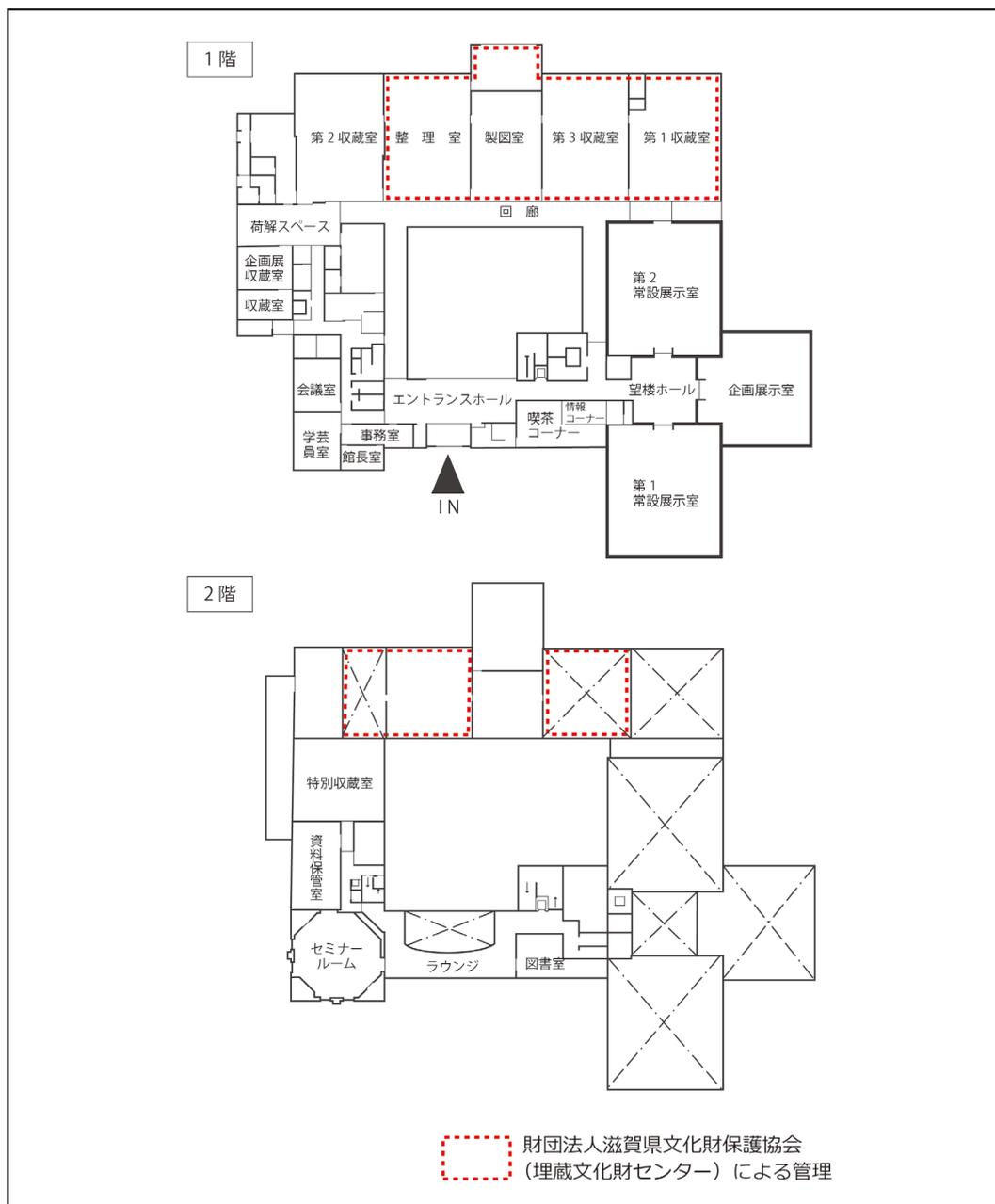
図表 5 : これまでの主な出来事

年（年度）	主な出来事
昭和 45 年	滋賀県立近江風土記の丘資料館の設置
昭和 57 年度	滋賀県地域博物館構想の策定
昭和 63 年度	近江風土記の丘整備基本計画の策定
平成元年	特別史跡安土城跡の発掘調査の開始
平成 4 年	滋賀県立安土城考古博物館として開館
	開館記念特別展「織田信長と安土城-信長の世界-」を開催
	滋賀県安土城郭調査研究所の設置
平成 5 年	年度毎に春季および秋季特別展のほか企画展を 2～3 回開催
	入館者 10 万人達成
平成 8 年	文化財保護法に基づく重要文化財公開承認施設に承認
平成 13 年	常設展示の一部リニューアル完了
平成 14 年	開館 10 周年
平成 21 年	常設展示の小中学生料金の無料化
	入館者 100 万人達成
平成 24 年	開館 20 周年
	開館 20 周年記念湖上フォーラムの開催
平成 27 年	重要文化財旧宮地家住宅の保存修理が完了
平成 28 年	入館者 130 万人達成
平成 29 年	開館 25 周年

3. 施設概要

- 博物館施設は鉄筋コンクリート造の2層構造で、延床面積5,846㎡、敷地面積67,836㎡の規模を誇ります。安土城天主5階部分の八角形と天主の高さ31メートルをモデルとした望楼を所持し、その下の望楼ホールに面して2つの常設展示室と企画展示室を配しています。
- また、埋蔵文化財センター機能を併設した部分では、出土遺物の整理作業を窓越しに見学できる回廊展示、エントランスホールにおいては調査成果等の速報展示を行うロビー展示や喫茶コーナー、2階には図書室やセミナールーム等を設けています。

図表 6：施設平面図



- 敷地内には、旧宮地家住宅（重要文化財）や旧安土巡査駐在所（県指定文化財）、旧柳原学校校舎（県指定文化財）の他、安土城跡をはじめとする中世城郭の調査研究拠点である旧滋賀県安土城郭調査研究所（旧近江風土記の丘資料館）を併設しています。
- 隣接する「文芸の郷」には、スペイン・ゼビリア万博の日本館メイン展示物として復元された安土城天主を展示している「安土城天主 信長の館」や音楽ホールの「文芸セミナリヨ」、多目的に活用できる「あづちマリエート」などが配置されています。

図表 7：敷地配置図（文芸の郷含む）



4. 活動内容

- 本館が掲げる3つの活動の柱は、以下の通りです。

- (1) **展示事業**：近江風土記の丘その他県内各地の文化財および文化財に関する資料の収集・整理・保管および展示
- (2) **資料調査事業**：博物館資料に係る調査研究および普及啓発
- (3) **教育普及事業**：その他博物館の設置目的を達成するために必要な業務

(1) 展示事業

- 本館の設置目的「郷土の文化財を保存し、且つその活用を図り、県民の文化の向上に資すること」を達成するための事業の1つ目として、第1・第2常設展示室および企画展示室により、近江風土記の丘を構成する史跡を中心とした展示を実施しています。
- 第1常設展示室では、近江風土記の丘に存在する大中の湖南遺跡（弥生）、瓢箪山古墳（古墳）の遺跡を中心として、関連する時代の展示を行っています。第2常設展示室では、観音寺城跡（中世）や安土城跡（戦国）を中心に城郭を紹介する展示を行っています。
- 企画展示室では、常設展示に関連するテーマを設定し、年4回の特別展・企画展を開催しています。その他回廊やエントランスホールにも展示を行っています。



第1常設展示室



第2常設展示室

(2) 資料調査事業

- 2つ目の事業として、資料の調査・収集（資料調査活動）と、設置目的をより深く掘り下げるために行う計画的・集中的な調査・研究（調査研究活動）を展開しています。
- 資料調査事業の対象は、考古・民俗・文献・美術・工芸の各分野に及び、また、調査の成果は各種刊行物を通じて県民へ公開しています。



安土城跡の発掘調査



収蔵庫資料整理状況



資料の整理調査の様子

(3) 教育普及事業

- 3つ目の事業として、県内外の学校との連携を深め、高齢者をはじめとする多くの県民が近江の歴史や文化財に親しむことができるよう、学習の場を提供しています。具体的には、講演会や調査報告会等の開催や体験博物館、こども考古学教室等の実施、史跡や展示・施設の案内、図書閲覧サービスやホームページによる情報の提供などを行っています。



城跡に関する講演会

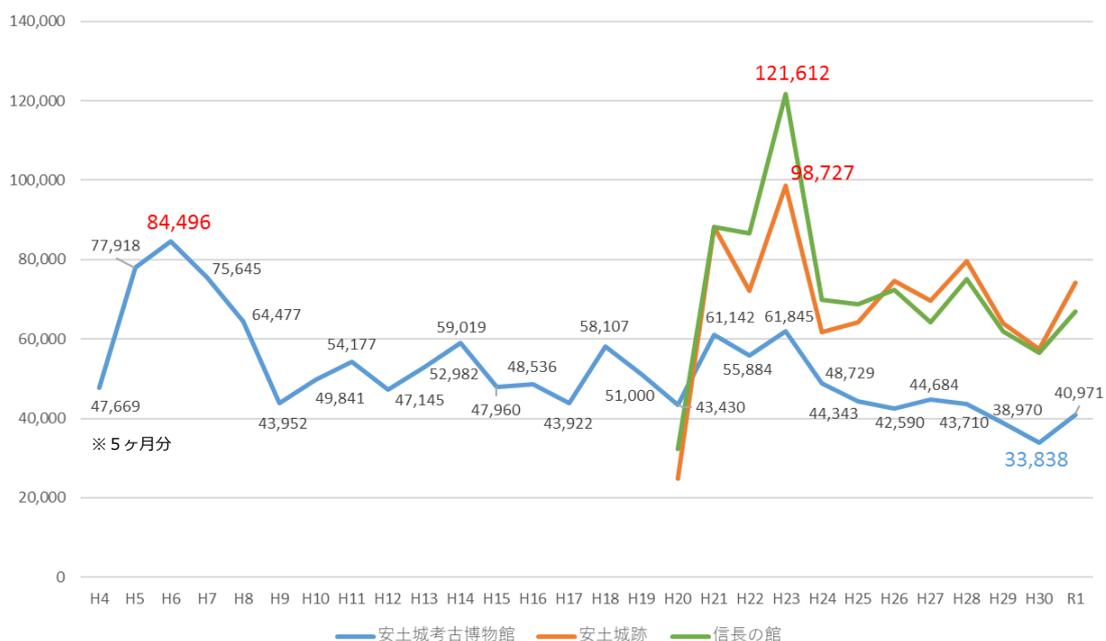


城郭探訪の様子

5. 利用状況

- 本館と安土城跡および信長の館の入館者・入城者数の推移は以下のとおりです。本館は平成6年度の84,496人を最高に、ここ数年は4万人前後で推移し、累計の入館者数は145万人を突破しました。現状の年間目標入館者数は5万人です。
- 安土城跡と信長の館と比較して本館の入館者数は少ない傾向にあります。特に、安土城跡と信長の館とでは、毎年3万人程度の差が生じており、隣接しているにもかかわらず足を運んでもらえていないという現状が読み取れます。

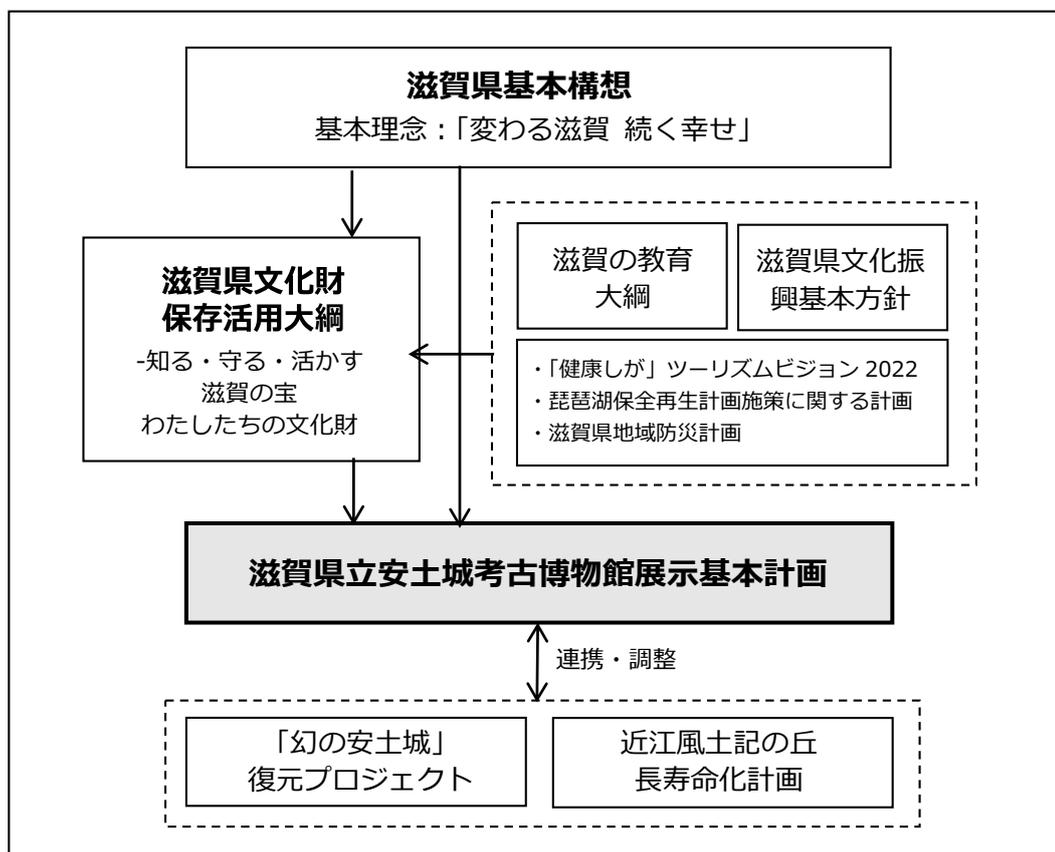
図表 8 : 3 施設の年間入館者数の推移



6. 上位・関連計画

- 本計画に関わる上位・関連計画とその位置づけを、以下に整理します。

図表 9：上位・関連計画（事業）との関連



図表 10：滋賀県基本構想（抜粋）



図表 11：滋賀県文化財保存活用大綱（抜粋）

■五つの柱

(4) 文化財を保存・継承・活用・発信できる施設の確保

文化財はそれ自体の価値もさることながら、その文化財が生み出され、守り伝えられてきたその場所にあることに価値があります。そのため、社寺等の団体が所有し地域との連携のもとで守られている美術工芸品などについては、文化財収蔵施設の建設や回収への助成などを通じて引き続き支援していきます。

また、地域力の低下により地域での収蔵、保管管理が困難となってきたり、自然災害等の不測の事態への備えから、県内において地域の文化財を受け入れ、収蔵、保管管理し、公開活用できる施設を確保していきます。

さらに、これまで行った発掘調査に伴う多くの出土文化財や調査成果のほか、指定により保存を図っている史跡等の価値を広く共有するための公開活用施設や史跡整備の充実を図ります。

図表 12：「幻の安土城」復元プロジェクト

■主旨目的

- 安土城の実像を解明し、それを目に見える形で復元することで、安土城の魅力をより多くの人々に実感してもらうことを目的として実施している事業です。

■プロジェクトの中での博物館の位置づけ

- この中では安土城跡に関する調査研究の成果を発信するため、安土城見える化の拠点として本館を位置づけることとしています。

世界とつながりわくわくするチャレンジ～夢と活力ある新たな時代への挑戦～

「幻の安土城」復元プロジェクト 期待しているぞ！

全国的な知名度を誇る安土城の実像を明らかにし、目に見える形で復元し、世界に誇れる安土城を発信することを目指す。

安土城復元に向けての調査および検討・機運醸成

安土城の実像の解明と現地の保全

知られていなかった遺構の発見！ 調査資料のさらなる活用

さらなる実像の解明に向けて 城跡を未来に伝える

安土城見える化の検討

新しい見せ方の工夫 幻の屏風の情報を求めて

安土城復元に向けての機運醸成

全国へ発信 県内の盛り上げ

見える化の方向性・方法の決定

計画 策定 → 実施

安土城調査整備 博物館整備 城下町整備 建物復元 デジタル(VR・AR) 多言語化

準備：キックオフイベント 安土城見える化の実現

安土城築城450年祭 織田信長450回忌

安土城の魅力を未来に継承し、世界に発信 さらなる実像の解明と将来に向けての保全

1-3. 博物館の強み

1. 調査・研究の成果（充実したコレクション）

：調査・研究成果の蓄積と考古資料+戦国・信長関連のコレクション

2. 歴史的な立地環境

：全国的に著名な安土城跡に近接、歴史的風土と環境に囲まれる

3. 豊富な特別展・企画展の実績

：話題性・集客性の高い安土城や戦国時代、城郭、信長関連の展示をはじめとする年4回の開催

1. 調査・研究の成果（充実したコレクション）

- 本館には、開館以来28年に渡る調査・研究と、それらを活用した展示活動や普及啓発活動など豊富な活動実績があります。また、県内の考古資料に加え、平成元年から20年間に渡る安土城跡の発掘調査に代表されるように、戦国・信長関連の調査・研究成果の蓄積および充実したコレクションを有しています。
- 本館の収蔵品は、近江風土記の丘資料館からの継承やその後の購入品、寄託品などで構成されています。収蔵資料点数は29,883点、うち重要文化財が5,869点、県指定文化財が3,386点など貴重資料も多数所有しています。

図表 13：登録資料点数（令和2年3月31日時点）

分野	件数	点数
総計	7,239 件	29,883 点
絵画	119 件	160 点
彫刻	5 件	7 点
工芸品	55 件	97 点
書跡典籍古文書	354 件	17,989 点
歴史資料	595 件	1,574 点
考古資料	6,056 件	10,001 点
民俗資料	55 件	55 点



安土記（天守の次第）



近江国蒲生郡安土古城図（摺見寺蔵）

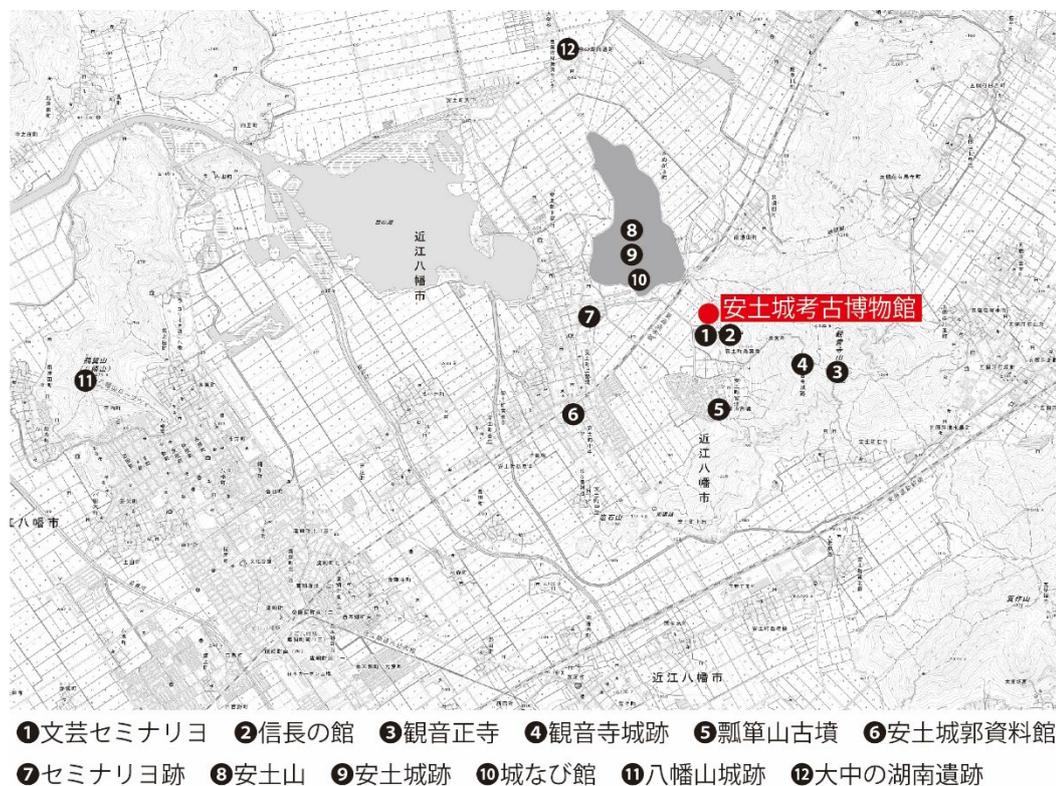


織田信長朱印状

2. 歴史的な立地環境

- 「滋賀県文化財保存活用大綱」によると、本県は古来より交通の要衝として、政治的・軍事的にも重要な役割を担ってきました。このため、古代・中世・近世と様々な歴史の舞台になっており、令和2年現在、国指定文化財が1,349件、県指定文化財が508件、市町指定文化財が1,582件で合計3,439件の文化財が指定されています。また、単位面積あたりの城郭数も全国1位を誇るなど、全国屈指の文化財保有県になっています。
- とりわけ、近江風土記の丘が位置する安土エリアは、織田信長が天下統一のため築城した「安土城」などで国内外に広く知られており、昨今ではドラマやゲーム等の影響から年齢層を問わずその認知度はますます高まっています。
- また、周囲には近江の守護であった六角氏の居城である観音寺城跡や日本初のキリスト教学校であるセミナリヨ跡など、戦国初～後期の風土および史跡が多く残っています。まさに戦国時代のメッカであり、本館を基点とした歴史・史跡回遊へつながっています。

図表 14：安土エリアの史跡群・歴史関連施設



3. 豊富な特別展・企画展の実績

- 本館では調査・研究の成果を発信する場として、年4回の特別展・企画展を開催しています。中でも春季特別展では、織田信長と安土城を中心とした城郭・戦国時代をテーマとし、全国各地から資料を借り受け、記念講演会やシンポジウムと併せて専門性の高い展示を行ってきました。

図表 15 : 直近 5 年分の展示実績

年度	種別	テーマ
平成 28	春季特別展	信長の家臣たち
	企画展	近江の古墳時代
	秋季特別展	飛鳥から近江へ
	企画展	大湖南展
平成 29	春季特別展	信長のプロフィール
	企画展	近江の城を掘る
	秋季特別展	青銅の鐸と武器
	企画展	収蔵品で語る城郭と考古
平成 30	春季特別展	武将たちは何故、神になるのか
	企画展	寺と城ー近江の瓦ー
	秋季特別展	キミそっくりな古代人がいたよ
	企画展	近江の考古学黎明期
令和 1	春季特別展	安土ー信長の城と城下町ー
	企画展	塩津港遺跡発掘調査成果展ー古代の神社と祭祀を中心にー
	秋季特別展	「動物美術館」開演！
	企画展	安土・桃山時代の近江展ー琵琶湖文化館収蔵品を中心にー
令和 2	企画展	お城のリユースー信長・光秀・秀吉・家康ー
	秋季特別展	信長と光秀の時代ー戦国近江から天下統一へー
	企画展	琵琶湖文化館の『博物誌』ー浮城万華鏡の世界へ、ようこそ！ー

1-4. 利用者のニーズ

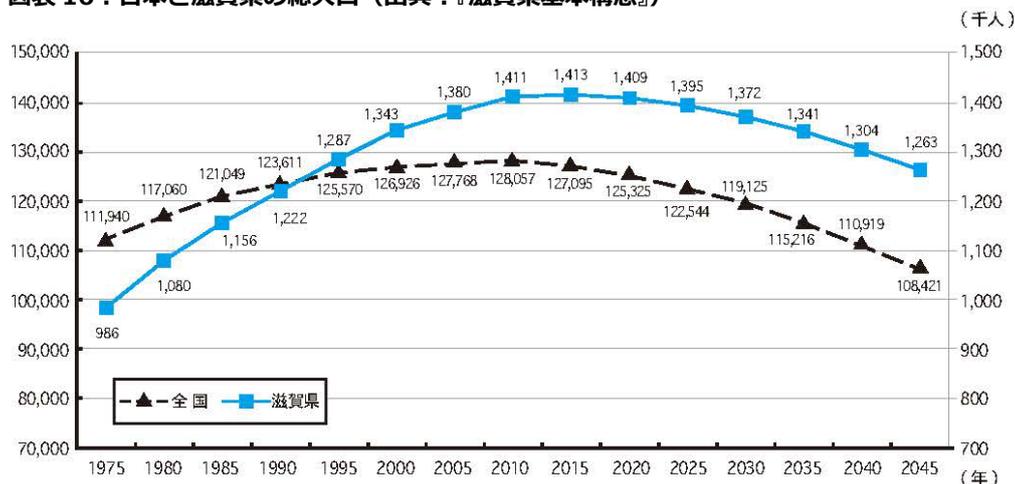
- 本館が開館してから現在に至るまで、博物館を取り巻く状況は大きく変わってきました。このような社会情勢の変化を整理し展示リニューアルの方針として位置付けます。

- (1) **社会環境の変化**：人口減少社会・超高齢社会への突入や訪日外国人数の増加、新型コロナウイルスの世界的流行など
- (2) **教育環境の変化**：学習指導要領の改訂や平均・健康寿命の延伸など
- (3) **博物館を取り巻く環境の変化**：
文化財保護法の改正および滋賀県文化財保存活用大綱の策定など

(1) 社会環境の変化

- 日本では既に人口減少社会・超高齢社会に突入しており、本県でも平成 26 年から減少局面に入りました。全国的に見ると若い世代の割合が高い県ではありますが、今後 10 年の間に高齢化が急加速する見込みです。こうした状況を踏まえ、本館でも利用ターゲット層を見定めた計画が重要となります。
- 訪日外国人数は年々増加し、日本政府観光局によると、令和元年には約 3,188 万人を突破し統計以来過去最多を更新しています。本県でも、クールジャパン戦略の一環である日本遺産「琵琶湖とその水辺景観－祈りと暮らしの水遺産」により、彦根城や白鬚神社などの歴史的文化遺産への入込客が大幅に増加、約 60 万人（前年比 + 11.9%）となり過去最高を記録しました。それに伴い、博物館でもインバウンド対応としての多言語表記や携帯端末によるサポート、体験性を高める工夫などが急務となりました。
- しかし、令和 2 年の新型コロナウイルスの世界的流行に伴い、訪日外国人数および国内旅行者数は激減し、回復の目途は立っていません。今後は、直接来館せずとも楽しめるオンラインコンテンツの提供など、博物館も新たな取組が求められています。

図表 16：日本と滋賀県の総人口（出典：『滋賀県基本構想』）



(2) 教育環境の変化

- 学習指導要領が約 10 年ぶりに改訂され、令和 2 年度より順次実施されます。「主体的・対話的で深い学び」の実現へ向け、社会教育施設等の活用についても謳われています。本館でもこれまでの実績を活かした、さらなる活動の充実が求められます。
- 本県は、平均寿命・健康寿命が全国上位で年々伸びており、学習・自己啓発活動やボランティア活動といった生活習慣を持つ人が多いという調査も出ています。学校教育に加え、様々な年代・多様なニーズに応じた学習機会・情報の提供が重要です。

(3) 博物館を取り巻く環境の変化

- 訪日外国人数の増加や地域利用の促進等により、博物館は本来的な機能に加え、文化振興や観光振興、交流促進、第三の居場所といった機能も求められています。
- 地域における文化財の総合的・計画的な保存活用を推進するため、平成 30 年度に文化財保護法の改正が行われました。その中で、文化財を地域の文化や経済の振興の核として、多くの人が参画して地域社会全体で確実に未来へ継承する方策を進めるために、県に対して新たに文化財保存活用大綱の策定を促しています。
- それを受け、本県の文化財を確実に次世代に継承していくため、文化財の保存と活用に関する総合的な施策を定めた「滋賀県文化財保存活用大綱」を令和元年度に策定しました。

2. 本館に対する利用者の要望

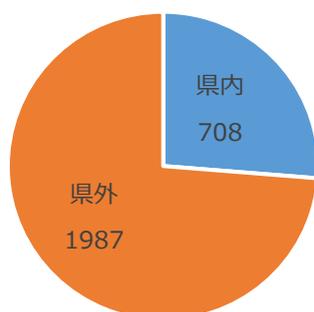
- 利用者アンケート（令和元年度実施：回答総数 2,707 件／回答率 10～15%）より、本館に対する要望を整理しました。

- 県内利用者の割合が少なく、初めて訪れる利用者が半数以上であることから、県民利用を促しリピーターとなってもらうことが必要。
- 女性や 20 代以下の若年層へ向けた取組が求められます。
- 自家用車以外の利用者に対する取組や配慮が必要です。
- 多くの利用者が安土城跡や信長の館をきっかけに来館するため、本館を基点に周辺施設・史跡へ興味を持たせるしかけ・情報発信が必要です。

図表 17：アンケート結果

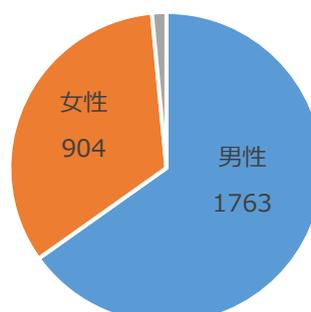
<居住地>

- ・県内と県外の利用者割合はおよそ 3:7



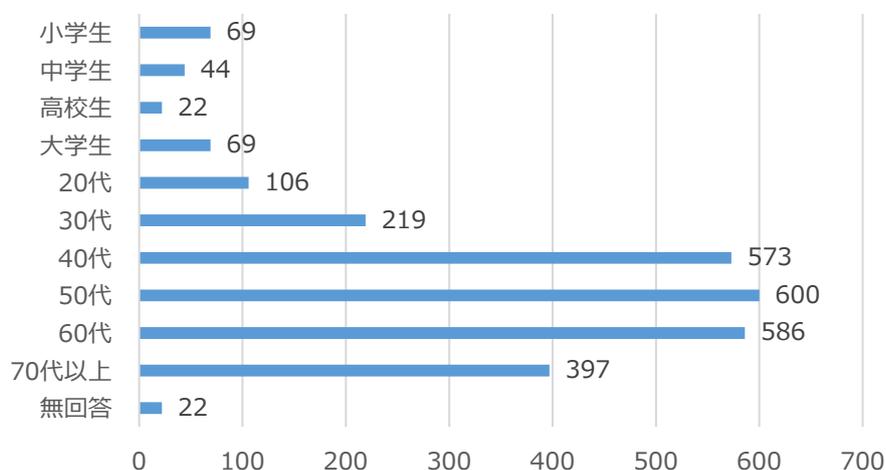
<性別>

- ・男女比はおよそ 2:1 で、男性の方が多い



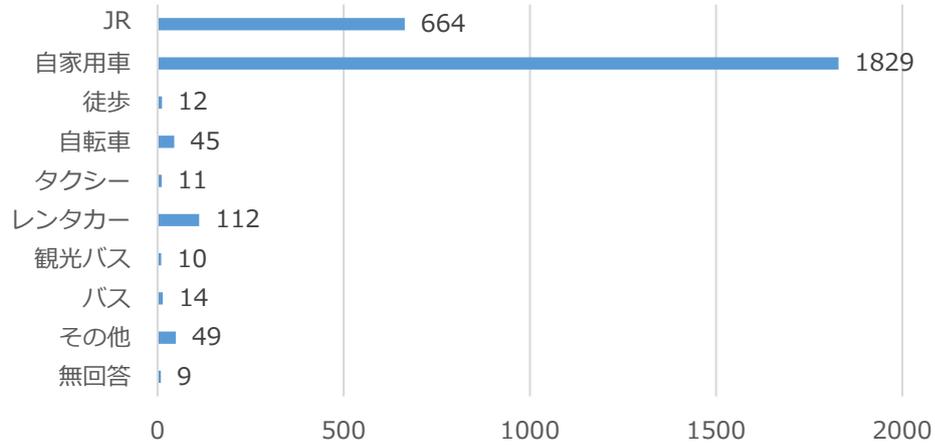
<年齢>

- ・全体の 6 割以上を 40～60 代が占める一方、20 代以下は約 1 割に留まる



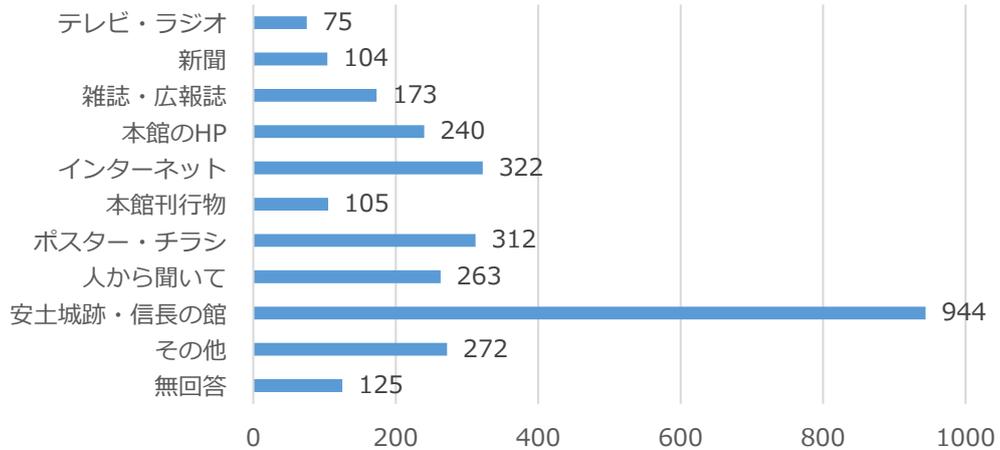
<交通手段>

・利用者のうち、およそ7割は自家用車、2割は電車を使って来館



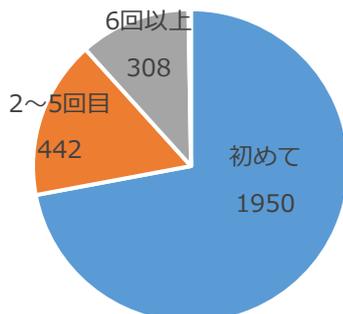
<展示を知ったきっかけ>

・安土城跡・信長の館から本館へ訪れる利用者が最も多い



<来館回数>

・リピーター利用は全体のおよそ3割



<自由記述（一部）>

■常設展示に関する意見

- 模型・モニターなどの展示が見やすかった。
- 天守の内部を知る展示があればと思う。
- 目新しい展示や展示方法が無かったのが残念。
- 天守跡には登れていないが（体力的に無理）、写真を見て満足した。
- PCを使ったクイズや3Dバーチャルなどがあるとよい。
- 常設展は色々な城を紹介しているが、何が言いたいのか分からなかった。
- 体験型展示があればよかった。
- 音声案内があるともう少し分かりやすい。
- 信長についてもっと前面に打ち出してほしい。
- メインとなるものをドーンと見せた方がよい。
- 安土城が築城された頃と現代の地図が重なっているように表現された模型や映像があると面白い。
- 戦国時代を詳しく、分かりやすく情報発信した方がよい。など

■特別展示・企画展示に関する意見

- 常設展示に比べて見応えがあった。
- プチ情報のような小さなコメントのものが分かりやすかった。
- 考古学的展示物が豊富で参考になった。
- 信長に関連した企画展を数多く開催してほしい。安土城＝信長だから。など

■その他・全体に関する意見

- 入場料が高い。
- 外国人の来場者へどのように対応するか検討する必要あり。
- 館内で喋れるようにしてほしい。
- 足が悪いため、車椅子または電動椅子がほしい。
- 駅から遠いのが残念。往復タクシーは金銭的に厳しい。
- ルビがあると分かりやすい。
- 写真撮影ができないのが残念。
- 博物館のことがあまり知られていない。ネットを活用したPR拡大をした方がよい。など

1-5. 課題

- 本館においては、機能面・設備環境面で不十分な状況にあり、以下に示すような課題が挙げられます。

1. **利用者ニーズとのかい離**：展示コンセプト・テーマの設定など
2. **設備・展示物の老朽化**：展示物や手法の見直し、更新性への配慮など
3. **公開承認施設の機能維持**：空間環境・設備・展示ケースの改修など
4. **利用者サービスの充実**：多言語対応、オンラインコンテンツの充実など
5. **回遊のしくみづくり**：ガイダンス機能の充実、サインの設置など
6. **集客性の向上**：情報発信の取組強化、名称・愛称の見直しなど

1. 利用者ニーズとのかい離

- 現状では、開館当時の方針で近江風土記の丘資料館の後継施設としての色を強く打ち出している一方、利用者の多くは安土城や信長、戦国に関する情報を求めて本館へ訪れています。また、利用者アンケートや企画展入館者数からも安土城や信長に強い関心が寄せられていることが読み取れ、利用者ニーズと展示内容との間にかい離が生じています。
- 展示スペースが限られているため、どの史跡・時代もガイダンス程度に留まり、展示内容に広がりがありません。特に、安土城や信長の情報量は少なく、安土城跡との一体感を創出できていません。
- 安土城跡に近接する立地特性や豊富な調査・研究成果をこれまで以上に活用し、他館との差別化や内容のメリハリを踏まえて、従来の利用者層だけでなく幅広い層への発信として、展示コンセプト・テーマの見直しを行う必要があります。

2. 設備・展示の老朽化

- 開館以降、常設展示の抜本的な更新ができておらず（平成13年の一部リニューアルはレイアウトの変更やケースの増設がメイン）、平成元年から20年かけて実施してきた安土城跡の調査成果が十分に反映できていません。そのため、入館者数は伸び悩み、一度来たら十分と考える利用者も多く、リピーター確保へつなげていません。
- 経年変化による映像・模型・パネル展示などの陳腐化による発信機能の弱体化、利用者の理解を効果的に促す参加体験型の展示の不足が見られます。最新デジタル技術を活用するなど、子どもや外国人でも直感的に楽しめる展示が求められています。

3. 公開承認施設の機能維持

- 本館は文化庁の承認を受けた公開承認施設であり、それに関する規程の承認基準を満たす機能を保持する必要があります。
- 展示室においては、高天井、不定形状のため安定した温湿度環境が保ちづらくなっている他、大型開口・吹き抜け空間に隣接するため外気や粉塵の流入が想定されます。設備面では機器更新時期に伴う経年劣化、また、展示ケースも環境や使い勝手、メンテナンスの面で改善の余地があります（建築設備改修に関する詳細な課題や改善方針については、第5章を参照のこと）。

設備：空調設備の劣化、ボタン操作による照明の使いづらさ・運用負荷など
展示ケース：企画展示室の中央ウォールケースの分断、ガラス面への反射による見づらさ、両側2ヶ所からの入替による破損リスク、蛍光灯の使用など

4. 利用者サービスの充実

- 車いす利用者や視覚・聴覚等に障害をもつ方、外国人も含めた全ての人々に開かれた施設としての整備を図る必要があります。中でも、解説パネルの多くは多言語化されておらず、外国人に対する情報提供が不十分な状況です。
- 子どもや高齢者にも読みやすい表現やルビ表記、文字サイズ等への配慮が必要です。
- 展示内容の更新に加え、何度も訪れたいくなるしかけについて検討する必要があります。
- 直接訪問する以外に本館の展示を楽しめるオンライン上のコンテンツが少ないため、たとえば滋賀県立図書館が運営する「近江デジタル歴史街道」や近江八幡市の「近江八幡市歴史浪漫デジタルアーカイブ」など、With コロナ期における博物館の在り方を検討する必要があります。

5. 回遊のしくみづくり

- 館内において、周辺施設や県内史跡などのガイダンスが十分に行えていません。多くの利用者が安土城跡や信長の館をきっかけに来館するため、本館を基点に周辺施設・史跡に興味を持たせる仕掛け・情報発信が必要です。また、本館だけでなく、近江風土記の丘公園や市域全体を展示・活動の場とするなど、エコミュージアムの視点で一体的に検討していく必要があります。
- 近江風土記の丘公園内における誘導サインや案内板、解説サイン等の視認性が弱く、デザイン的な統一も図れていません。

6. 集客性の向上

- 現在のメイン利用者（40～60 代の男性）の満足度向上に加え、これまで集客の弱かった子どもとその家族、20 代以下の若年層および無関心層を本館に引き込むしかけや情報発信の仕方を、オンライン・オフライン問わず検討する必要があります。
- 安土城跡や隣接する信長の館をきっかけに本館へ訪れる人が多い一方、年間入館者数では差が生じているため、より多くの利用者を本館へ引き込むための魅力的なコンテンツや情報発信が求められます。
- 最寄駅から本館へのアクセスが不便で、利用者の多くが自家用車での来館です。アクセスについて物理的な解消は難しいものの、自家用車以外の利用者に対するサービスや取組についても検討する必要があります。
- より親しみを持ってもらうとともにリニューアル感を創出するため、現状の施設名称「安土城考古博物館」や愛称についての検討も必要です。